

深雪の光は行手を照らせど

手足は凍ほり息もやたえん

「噫、神々天と仰ぎて祈りけり

我身ひゆとも「噫神！」

いとしき稚兒を救ひませ。

母は綿襖を解き去れば

寒風しみて膚を裂き

稚兒温安かれとかきいだく

双手は雪になえはてぬ

頬の接吻涙散り

何時か雪路に風折る、

夙旅人過ぎ行けば

雪に埋みし人や誰、

目は安らげく閉されて

冷たき頬は色あせぬ

胸の破衣を掻き去れば

嬉れしき稚兒の微笑は洩れぬ。

あゝたゞ天に

豊

洲

夜半のあらしに怒あり

あしたの霜につるぎあり

人のこゝろにわたみあり

あゝたゞ天に光あり。

おつるこのはに憂あり

匂ふすみれに限りあり

人のいのちに定めあり

あゝたゞ天にさかえあり。

登る朝日に曇りあり

かゞやく星にきはみあり

人のたもとなみだあり

あゝたゞ天にまことあり。

流るゝ水によどみあり

もゆる骸にあくまあり

人のおもひにけがれあり、

あゝたゞ天にのぞみあり。